



追悼 戸木田嘉久先生を偲ぶ

当研究所の創設呼びかけ人として、また創設期から最後まで研究委員の責を全うされた戸木田嘉久先生(立命館大学名誉教授)が、去る2013年2月26日お亡くなりになりました。享年88歳でした。ここに哀悼の意を表し紙面をとらさせていただきます。

戸木田さんを偲んで

三好 正巳

ご子息からの電話で訃報を聞いたとき、駆けつけねばという想いだけが頭に浮かんだ。替わって電話にでられた奥方から辞退する旨の事情を聞かされて、訪問は断念するしかなかった。今その時の経過をおもうとき、陸游の詩を思い起こす。

わか少き時は愁いを喚びて底物ぞと作せしに
老境にいたりて方めて世に愁いあるを知れり
世間を忘れ尽くすとも 愁いは故のごとく在り
身を和に忘れ却りて殆く応に休むべけん

突然の訃報には、一瞬の驚愕ののち深く永い愁いにおそわれる。此度の憂愁以前にも経験したことがある。妻を亡くしてあまり時をおかずに期待もし目もかけていた助手の訃報が突然としてもたらされた。この時も驚きとともに気持ちは落ち込んだ。戸木田さんの訃報は、老境に入ってからのことだけに、愁いは後をひく。こんな気持ちで追悼文を書かねばならないとは。

戸木田さんの数多い業績を今更書く気にはならない。業績や人となりについては他にも書く人がいるだろう。私にとっては、戸木田さんはあまりに身近な人であった。そんな私が今書けることは、正道を外すことのない戸木田さんと突飛で陽のあたるところには尻込みする私との長い付き合いをさらけ出して故人を偲ぶことだけである。

戸木田さんと私が初めて会ったのは、大学助手の約束契約期限1年が終わって、失業中である。戸木田さんは九炭労(労組)モルタル2階建事務所の2階の一室を借りて、九産労(研究所)の事務局長をしていたころである。そのとき奥方も庶務(?)をされていた。50年を経過した今、やや記憶は怪しくなっているが、九大の森耕二郎、馬場克三、吉村正晴、正田誠一などの諸先生がかかわって、満鉄調査部から敗戦で帰還された松岡瑞雄さんたちが設立された九州経済調査協会に戸木田さんも在籍されていた。うえからの指示で九大の諸先生が大学に引き上げられたとき、戸木田さんは九経調から移られて、九産労の設立に参加し、事務局長の職に付かれたと記憶している。当時人づてに聞いたこの私の記憶が正確かどうかは、戸木田さんの奥方にでも確かめる他はない。

失業中の私は、職安に2週間に1度の割で保険金を受けに出頭し、助手の失業仲間と近況を話し合うのが仕事であった。そしてその間、九経調の調査アルバイトで生計費の一部を稼いでいた。このアルバイト収入はその金額に見合うだけ保険給付が先送りされて給付期間が伸びる物であって、失業中に妻をめぐっていた私は先送り分だけ食い延ばすことができるわけで、兄の家の別棟に住んでいた身にはそれなりに有り難いことであった。また、九産労では、時に労組への講演の仕事を回して貰い、この講演の仕事は失業1年後鹿児島に職を得てか

らも九大に内地留学したときにも続いた。今思い出せば顔が赤くなるような内容の話であったと、忸怩たる想いである。

その後、立命館大学に移るまでも、私の関与しない話があったようだが、ともかく戸木田さんが中に入っての立命館への転職が実現したのである。丁度内地留学で福岡に来ていたので戸木田さんと奥さんと2人の男の子一家を博多駅に見送った記憶は鮮明である。そのときには数年後に私自身が京都立命館に転出するとは夢にも思わなかったことである。

私が立命館に赴任した年の秋には立命館大学院経済研究科で紛争が起き、年が明けて直ぐ全共闘の学生によって広小路の本部棟が封鎖され、新学期になってから紛争は衣笠キャンパスに広がり学園紛争は全学に広がった。この間戸木田さんは学部主事、学生部長として対応にあたる激職を経験された。若い頃にラクビーの経験があつたとかで胸幅は広く体力に恵まれているようだったが、それにしても昼も夜もないような会議や交渉など責任の重さからして、疲労の蓄積が心配された。赴任して1年経過したところで、突然経済学部の学生補導主事（当時）に3階級の特進となり、戸木田学生部長のもとでもともかく仕事をするようになった。これも不思議の縁であり、その後学生部長とか不似合いの役職を務めることにもなった。

因縁はこればかりではない。研究と著作の上でもそうであった。東京のある出版社の会議室での議論の場に参加することになったのも、おそらく戸木田さんの推薦があつてのことであつたろう。そこでも、私だけでは知り合いになれなかったであろう多彩な人たちと同席することになった。また、京都でも、くらしと協同の研究所に属する研究会に参加して、戸木田さんと2度

も共著の出版にも関係した。私としては本来の研究課題ではなかったものの大きな経験であった。しかし、何よりも記憶に残ることは、上野俊樹さん、戸木田さんそして私と3人で立ち上げた労働総研の関西部会ともいえる関西労研がいまも続いていることである。戸木田、上野の2人は故人となり、おまけのような私だけになったが、他の熱心なメンバーが引き継いでくれたので、戸木田、上野さんの手前ホツとしている。

戸木田さんを偲ぶ想いは、私自身のことに終始したようだが、私の生活の中でこれほど大きな影響をもたらしたということでお許し頂きたい。最後に、「諸階級」論について考察するつもりと、戸木田さんに言ったことをそのままにして気がかりだが、いつの日にか約束を果たすことをちかかって、ご冥福を祈るものである。

（立命館大学名誉教授）

あの運動靴の人が…

久保 建夫

私は大学進学と同時に堺の金岡団地から枚方の香里団地に移った。香里ヶ丘六丁目から通学していたが、バス停にはいつも気になる人がいた。上下のスーツの時もあるし学生のようにラフな服装に運動靴の時もある。黒い鞆を肩に掛けて眼鏡の奥でいつも考え事をしている風であった。一見30歳前後に見えてどこかの院生に違いない、と。26歳の春、70年京都府知事選挙の最中、新日本出版社『経済』編集部の部員になった。

月一回の編集委員会がもたれ、錚々たる経済学者が全国から集まってくるという。初めての会合に出ると、新入りがきたからと紹介が始まる。そこへ汗を拭きふき入っ

てきた人を見ると、それがなんと「バス停」で見かけた運動靴の人であった。しかも修論で活用した「資本主義的合理化」の戸木田嘉久その人であった。編集委員会では、労働者状態の実態把握をまず押さえつつもそのまなごしは常に社会変革の実践的課題と労働運動への問題提起に向けられていた。並み居る委員たちからも合いの手が入り、しばし議論をリードされた。編集企画では労働問題を担当しておられたものの、独占企業・産業の分析、農業農民問題等々経済学の広い裾野を有しておられた(『協う』07年6月 戸木田「私の研究紹介」)。

協同組合論への挑戦

私は83年京都生協に入り、20周年記念事業の一つ、生協理論研究会編『転換期の生活協同組合』(大月書店、87年)刊行を手伝ったが、本書は組合員意識調査、地域生協訪問調査に基づく本格的な生協論の魁ではなかったろうか。研究会の先導者は川口清史さんであったが、彼の最初の問題提起(84年)は、立命館大学生協15周年記念誌『生活協同組合と現代社会』(法律文化社、78年)の巻頭「経済民主主義と協同組合」(戸木田)の検討から始まっている(川口『非営利セクターと協同組合』日本経済評論社、94年)。生協に来て初めて知ったことだが、この戸木田論文は、当時の『生活問題研究』誌面をはじめ各生協の間でも話題になっており、「素人論議」と自称された割には大きなインパクトを与えていた。今読み返しても、今日の世界的危機下で国民生活を守り、社会のよりよい発展を展望するとき、協同組合はいかなる課題にどう向き合うのか等、問われるべき骨太のテーマが提供されている。温故知新である。

その後当研究所の自主研究会「生協職員論研究会」では、座長として『生協職員論

の探求』(法律文化社、97年)、『生協再生と職員の挑戦』(かもがわ出版、05年)刊行を率いていただいたが、それにとどまらず、『挑戦』第2章(三好正巳)中の「生活圏市場」に着目されてさらなる追究を求められたのである。3月、三好座長のもと『生活圏市場研究』刊行にこぎ着けたのが、奇しくも遺言の履行となった。

信念とタフネス

思い出にはきりがないが、編集者時代に印象深いことがまだある。『大月 経済学辞典』(79年)をご存知だろうか。内田忠夫、水野正一氏他近代経済学の長老や関連諸科学の専門家を交え824名の研究者・専門家を動員して編纂された画期的な経済学辞典。その中でとことん難航し、編集委員の中核に坐って剛毅でならした関恒義氏も自信消失気味の難問が残されていた。誤解を恐れずに言うと、高名な婦人問題研究者執筆の「労働婦人は組織された労働者として階級闘争に参加し、自覚を高めて婦人解放運動の主要な担い手となるが、家庭婦人はそうはなれない」という第一稿を、家庭婦人の社会的位置づけと正当な評価を加えて書き直してもらおうという難問であった。みなさん「婦人の敵」にはなりたくない、さすがの関先生もお手上げだった。ついに編集委員会を代表して戸木田先生が火中の栗を拾われることになり、白馬の騎士となって見事難問を解決されたというのである。いたく感動され関先生から「さすが戸木田さん、あのタフさに脱帽」と、私は何度となく感動的な一部始終聞かされることになった。

昨年の研究委員会終了時に先生をエレベーターまで送ったのが最後となった。症状も知らず残念でならない。

(当研究所客員研究員初代事務局長)